聖書のことば

正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。（ローマの信徒への手紙５章７～８節）

キリスト教会を表すシンボルとして十字架が用いられます。「キリスト教＝十字架」と言えます。十字架は、イエス・キリストが十字架に磔にされて死なれたという事実を伝えるシンボルです。何故、神の子であるイエス・キリストは十字架にかけられたのでしょうか。

300 年ほど前のヨーロッパにいたキリスト教会の伝道者の話しが残っています。彼はもともと、弁護士としてなかなかの活躍をしていました。ある時、豚飼いが豚を小屋へ入れようとしているところを見ました。なかなか小屋に入ろうとしない豚に腹を立てた豚飼いは、豚にむかってこう言ったそうです。「ぐずぐずしていると、弁護士のように悪魔に連れて行かれるぞ！」なんと、彼はこの言葉をきっかけにして教会へ行き始めるようになり、やがて教会の伝道者になりました。そして「私は豚を見て、神の羊小屋に導かれたのです。アーメン」と語りました。彼は豚飼いの言葉に神の言葉、滅びへの警告を聞き、救いを求めました。

今日の聖書箇所とは別の箇所で、イエス様がこういうことを語っておられます。「洪水になる前は、ノアが箱舟に入る日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり、嫁いだりしていた。そして洪水が襲ってきて一人残さずさらうまで、何も気が付かなかった」（マタイによる福音書 24 章 38～39 節）。創世記のノアの箱舟の話は有名です。ノアは滅びを避けるために大きな船を造りましたが、人々は無関心でした。彼らは滅びを恐れて備えをするノアを無視し、自分たちが滅びる可能性について考えませんでした。ドストエフスキーの『地下生活者の手記』という小説の中に、次のようなセリフがあります。「自分の今飲めるコーヒー一杯がありさえすれば、地球がたとい滅んだとしても、自分は何の関心もない」。

今日読まれた聖書は、人が誰かのために死ぬということはどのような時に起るのかについて、まず語っています。正しい人のために、つまりその人の言っていることが正しいからその人のために死ぬなどという者はいないのです。しかし善い人のためなら、あの人は本当に善い人だ、自分に善いことをしてくれた、親身になって助けてくれた、そういう人のためになら命を捧げる人もいるかもしれません。つまり、恩返しということです。

しかし主イエス・キリストが私たちのために命を捧げて死んで下さったのは、そのどちらでもありません。私たちは正しい人でもなければ善い人でもない、むしろ神様をないがしろにしている罪人であり、神様にとって敵となってしまっている者だったのに、その敵である罪人のために、主イエスは命を捧げ、死んで下さいました。「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださった」と今日の聖書は教えてくれています。

中国の古典「荘子」に、「いけにえの牛」の話があります。お祭りでいけにえにささげられる牛は、いい餌を与えられて育って太り、美しい飾りで装われます。大事にしてもらえます。しかし、祭りの最後に殺されていけにえにされてしまいます。荘子は、自分はいけにえの牛にされるより、泥の中で遊んでいる牛でありたい、と語りました。

教会で「罪」の話をして、私たち人間が「罪人」と呼ばれるのを、不愉快に思う方がおられるかもしれません。しかし、聖書が私たちを「罪人」と呼ぶ時に、「悪人」、「犯罪者」という意味で言っているのではありません。「罪人は滅びてしまえ!」と呪っているのではありません。全く反対です。聖書が「罪人」について語る時に、「滅びてはならない」という神様の御心が込められています。「罪」によって神様を見失い、いけにえの牛のように滅びに向かって進んでいるのが私たちでした。しかし罪に捕まっている私たちは、望んでも自由を得ることができません。救いへと逃れることができませんでした。そこで、神様は罪の支配から私たちを解き放つために、大切な独り子であるイエス様を与えてくださいました。そして、イエス様は私たちの身代わりとなって、罪の償いとして本当に十字架にかかって死んでくださったのです。「キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」